平成 21 年度
卒業論文抄録集

麻布大学　獣医学部　動物応用科学科
介在動物学研究室

発表会
平成 22 年 2 月

卒業論文

井田遥　　―

坂田日香里　　犬の社会的認知能力に関する研究
－指差し探索行動における犬種差について－

修士論文

市川将太　　―

篠崎真理　　―

濱崎春香　　―

博士論文

岡本雄太　　―

犬の社会的認知能力に関する研究
－指差し探索行動における犬種差について－

A06042　坂田 日香里

イヌは最初に家畜化された動物と言われており (サーペル, 1999) 、イヌの祖先はオオカミと共通であることが明らかになっている。しかし、オオカミからイヌに至る過程はいまだ明らかになっておらず、雑種交配にて第 2 世代まで繁殖可能であることから、オオカミとイヌは同種の動物であると考えられている。

一方、Parker ら (2004) が行ったマイクロサテライト多型の解析によって、オオカミに最も近い犬種は柴犬であることが明らかにされている。一般的に、柴犬などの日本犬種はトレーニングが難しいと言われており、アメリカにおけるイヌの気質アンケート調査（C-BARQ, Serpell）では、トレーニング性能において柴犬は最も低い得点となっている。これらは、ヒトの示すシグナルに対する認知能力の違いに起因する可能性があり、柴犬は認知能力が低いため、ヒトと上手にコミュニケーションがとれないのではないかと推測できる。そのため、柴犬をはじめとして犬種間での社会的認知能力の違いを調べることは、オオカミが家畜化されてイヌになり、ヒトと密接に関わるようになった要因を解明するうえで非常に有意義であると考えられる。

そこで、本研究では、犬種による社会的認知能力に差がみられるかどうかを明らかにすることを目的として、指差し探索実験を行い、日本犬種である柴犬や秋田犬とその他の洋犬種との正解数を比較した（18 犬種 69 頭）。

実験方法は以下の通りである。イヌに手がかりを与えないよう、2 つの伏せたカップのどちらかに餌をランダムに隠した。4 種類の方法を用いて実験者がイヌに正解のカップを示し、解放の合図とともにイヌにカップを選ばせ、直接餌の入ったカップに向かった場合を正解とした［①Gaze（顔は動かさず、目線のみを動かして正解のカップを見る）＋Point（正解のカップを人差し指で指す）＋Tap（正解のカップを人差し指で叩く）、②Gaze＋Point、③Point、④Control（提示なし）、Hare et al., 2002］。また、生活環境やトレーニング経験などの影響の有無を確認するために、イヌの年齢、飼育場所、トレーニング経験などについて調査した。

「柴犬」、「秋田犬」、「スタンダード・プードル」、「ラブラドール・レトリーバー」、「ゴールデン・レトリーバー」、雑種および頭数の少ない犬種を合わせた「その他の犬種」の 6 群を用いて統計解析を行った結果、②において、「ラブラドール・レトリーバー」と「その他の犬種」の正解数が「柴犬」と「秋田犬」と比べて有意に多かった。また、「スタンダード・プードル」と「ゴールデン・レトリーバー」の正解数が「秋田犬」と比べて多い傾向がみられた。③では、「ラブラドール・レトリーバー」と「その他の犬種」の正解数が「柴犬」と「秋田犬」と比べて有意に多かった。①および④では、群間に有意な差はみられなかった。

飼育場所については、室内で飼育されているイヌの正解数が屋外で飼育されているイヌ

と比べて有意に多かった。しかし、「柴犬」群内での比較では、室内で飼育されているイヌと屋外で飼育されているイヌとの間に有意な差はみられなかった。年齢やトレーニング経験における比較では、有意な差はみられなかった。

これらのことから、本実験で用いた犬種間における社会的認知能力に明らかな差があることが示された。屋外で飼育されているイヌにおける正解数の少なさは、屋外で飼育されているイヌが「柴犬」と「秋田犬」に偏っていたためである可能性が考えられる。「柴犬」群内における飼育場所の比較では有意な差がみられなかったため、今後、室内で飼育されている日本犬種や屋外で飼育されている洋犬種を追加することで、差はみられなくなることが考えられる。さらに、本実験での柴犬は、個体によって正解数にばらつきがあり、家庭犬に適した特性重視の選抜交配やヒトとの関わりなどの環境要因によって、犬種内に少なくとも 2 つの系統が存在する可能性が考えられる。

本研究において、日本犬種の社会的認知能力が洋犬種に比べて低いことが示唆された。今後、社会的認知能力が高いイヌと低いイヌの遺伝子を比較することにより、オオカミが家畜化されてイヌになり、ヒトと密接に関わるようになった要因の解明に一歩近づくことが期待される。また、例数および対象犬種を増やし、犬種による社会的認知能力の違いをさらに明確にすることで、犬種にあった適切なコミュニケーション方法の検討を行うことができるようになると考えられる。これにより、ヒトとイヌとのより良い共生に貢献することが期待される。

Key words：イヌ、社会的認知能力、指差し探索行動、日本犬種、犬種差